

武士道

特殊作戦群長 一等陸佐 荒谷 卓

特戦群戦士の武士道

一 確たる精神的規範（正義）を有し
生死の別を問わず事に当る腹決めをすること

一 臆せず行動できる勇氣（氣概）と

これを維持する氣力（胆力）を鍛錬すること

一 事を成し遂げる實力（知力、技術、体力）を
修養すること

一言動を一致させ信義を貫くこと



特殊作戦
群長戦殊

一 はじめに

わが国の防衛政策は、防衛力の政治的価値を「存在すること」から「実際に運用すること」へと転換しつつある。この背景はいくつか考えられるが、もっとも大きな要因は米国の戦略転換に起因するものと思われる。冷戦期において米国は、対ソ戦略上「極東地域における米軍への協力・支援」という役割をわが国に期待してきた。しかし、現在及び将来は「世界的規模での米軍の多様な活動への協力・支援」という役割を期待しているのを見ていいだろう。

イラクでの人道復興支援活動も、米国としては、当然そのような政治的期待感があつたものと思われる。人道復興支援のための自衛隊の活動自体は、戦闘を目的としたものではないが、実際に現地に赴く隊員はテロのリスクを感じないわけにはいかない。ベース外で警護等の任務活動をする隊員は、なおさらである。

つまり、日本政府が日米関係を重視する以上、今後この種の活動は継続するわけであり、これに参加する隊員は、少なからず「死」を意識せざるを得ないのだ。

そこで、問題が生じてくる。政治的に「存在すること」だけを期待され、現実味のない訓練をしてきた隊

員は、「死」に直面する場合の精神的訓練を受けてきていない。「一体自分は何のために死を覚悟してまで行動するのだろうか」という自問が出てくるのは当然であろう。あるいは「自分はいざというとき本当に引き金を引けるだろうか」という自問も、「何の目的で人を殺してまで行動するのか」という問題に置き換えられよう。要するに、自己及び他人の死をも踏まえた行動哲学の欠如という問題に直面するのである。

これは米国においても同様で、「死なないで勝つこと（ゼロ・カジュアリティ）」をうたい文句としてきた米軍の中でも、テロとの戦いが始まってからはこの問題が深刻化している。現在は、米軍においてさえ「死なないで勝つこと（ゼロ・カジュアリティ）」よりも、「テロとの戦いに勝利すること」の方が優先される時代になったといえよう。

二 今なぜ「武士道」か

米留中、特殊戦部隊のオフィスのあちこちで「武士道」という日本語の文字を見かけ、「君たちはこの文字の意味を知っているのか」と質問してみた。彼らの答えは、異質のメンタリティーが含まれてはいるものの立派なものであった。

今や日本人の多くが忘却し、理解できなくなっ

まった感のある「武士道」が、「正義のため自己の生死を問わず行動する哲学」として米国特殊戦部隊の中で生きている。ひるがえって、日本はどうか。自衛隊はどうか。「人の命は地球より重い」などという社会風潮の中で教育された者には「生きることが正義」であり「自己の生死を問わず行動する」などといった日には犯罪者扱いさえされかねない。

しかし、最初に述べたように、我々は今現実に、そのような精神支柱を必要としているのである。私は部下によく言うが「政治・宗教テロリストは、彼らの正義に基づいて決死の覚悟で行動している。彼らと戦うなら、それに負けない正義と信念を持ち合わせなくては勝てない」。また逆に、正義感も持ち合わせずに「命令ならば殺します。命令ならば死にます」という機械人間は、いまや戦闘員として不適切な人物といわざるを得ない。

必要なのは、任務行動に際して、他人や自分の「死」に直面しても正しいと信ずる行動を躊躇なく遂行できる精神支柱を備えた戦闘員である。ましてや、指揮官は自分だけでなく部下の生死に関しても責任を有する。部下が何のために人を殺し、自分の死をも許容するのかについて、責任を深く自覚しなくてはならない。

三 武士道とは

私は、空手から始まり、「鹿島神流」という古流を稽古して三十年になる。現在は、武道を通じて、自身の生き様・死に様を律しようと努めている。以下、体験も踏まえて私が思うところの「武士道」について述べる。

日本の神話において「武神」は、タケキモノ（モノとは人知の及ばない畏怖の存在・(例)モノノケ等）として語られている。特に国譲りの物語では、国をかけた攻防にも関わらず「心も体も動じない」タケミカヅチノ神の「構え」をもって、力持ちのタケミナカタノカミ（諏訪神社の御祭神）を降参させる。

この「心も体も動じない」タケミカヅチノ神の「構え」とは、後に宮本武蔵が「巖の身」（五輪の書）、「動くことなくして強く大なる心」（兵法三十五箇条）と表現したものと通じるように思う。すなわち、「生死のことにさえ動じない心（腹決め）」、もしくは「生死を超越した目的意識（志の確立）」ともいえるだろう。それが結果的に不要な体の緊張を解し「柔らかみ」と「集中」を同時に可能にすることは、実際に武道の修養を積みれば良く理解できるところである。

武道でないにしても、専職が高所で自在に行動でき

るのは落下する死の恐怖など気に留めないからであろうし、登山家も死の恐怖を乗り越えた時、とてもクリアできそうもない難しいルートを克服できると聞く。

現実の武士の起こりは、農民の中のタケキ人が公に朝廷に奉仕するようになり、もっぱら戦人として職業化することに始まる。この様な人々はモノノフ（畏怖すべき心の持ち主）あるいはマストラオ（優れて勇ましい男）として、万葉集を始め多くの古文書に現れる。農民の土地に対する『一所懸命』の思いを朝廷への忠義に置き換え、『二所懸命』（二心無くただ一つの真心を持って）奉仕すると誓ったところに武士道の起源がある。大伴武門の言立て（忠誠を表す誓詞）「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍、大皇の辺にこそ死なめ、顧みはせじ」は、その代表的な例といえるだろう。

このように、武士道の精神は、宗教や科学思想のように教義や理論に対してではなく、実在する人物に対して忠誠を尽くすことにある。人に対する忠誠というと、今の人権思想からは封建的とか奴隷的服従などと否定的に見なされがちだ。確かに、そのような形態は社会が安定し武士が役人化された江戸期の武士道には見られる。

いわゆる「お家のため」という考えである。我々陸上自衛官もくれぐれも「お家大事」的狭隘な武士道に

陥らないように気をつけなくてはいけない。また、この時期の武士道は総じて処世術的側面が強くなり、戦人の心構えというよりは、つつがない役人の心構え的なものも散見される。例えば、「葉隠」は、鍋島藩への絶対的服従を背景としている面があり、同時に処世術についても説いているなど武士道が狭隘化した感を否めない。

しかし、本来の武士道は、あくまで自発的なものである。武士道者とは自立した自己の意志に従って行動している者である。例えば、戦国時代末期の武將後藤又兵衛は、藩主黒田長政が忠義の対象ならずとみるや公に脱藩を取り付ける。幾多の高禄高の仕官の誘いに目もくれず、「己の義と信ぜざることは断じてやらぬ、己が武士として制約した義は必ず守る」と、最後は豊臣家臣として戦死する。

このように、人に対する忠義とは、突き詰めれば「己の真心」に対する忠誠といったほうが正しい。

また、忠義というのは実は相対的なものであり、主従という関係ながらお互いに志を尊敬し合う者である。例えば、米沢藩主上杉鷹山は、藩主教訓として「国家は先祖より子孫へ伝え候国家にして我私すべき物には之無。人民は国家に属したる人民にして我私すべき物には之無。国家人民のために立てたる君にて君のため

に立てたる国家人民には之無」と表した。

このような統治者の心があればこそ、この真心に対して同じく真心で忠誠を誓ったのが武士道である。さかのほれば、神武天皇が「民に利が有るならば先祖から受け継がれた正義に反するものではない。これをおかえりよう謹んで寶位（天皇の位）に臨み、国民を治める」と神に向かい民への奉仕を誓詞奉り一切の私事を放棄した（したがって天皇は氏も名も持たない）。朝廷への忠義というのは、その御心に答えての忠義なのである。

つまり、武士道というのは下から上への忠義だけではなく、忠義の対象となるべき上から下への心が有つてこそ成り立つ。日本における武將の統率のあり方は、これが模範となる。人と人の関係において、死に直面してもなお、自ら誓った志が揺るがぬほどに、心が大きく強くなれば武士道が完成する。生死に執着しない心情であれば、心の自由が得られ、体の自由が利くようになる。

日本武術の最大特徴は「入り身」にある。相手との間に自らの安全が保たれる間合いをとって戦うのではなく、自らの重心軸は安定させたまき、相手の重心軸が崩れるほど懐の中に入り込む。このとき激情したり体を強張らせたりすることなく、生死に執着しない心

情を保つことができれば、体もリラックスしたまま柔らかに無駄なく相手の動きと呼吸に合わせて必殺の間合いに入り込めるのだ。

銃撃戦でも、特に心理的動揺の激しい近接戦闘ではこの理が重要になる。「死」を恐れ撃たれまいと壁の陰等に一度隠れてしまったら、一挙に敵の猛攻を受け射殺される。また、任務行動とはいえ、興奮して人を殺せば後々まで心が苛まれることになるだろう。指揮官は部下をこのような目に遭わせてはならない。指揮官と部下との間において、生死にも揺るがぬ信頼関係を持ち得るようになることもまた「武士道」なのである。

四 おわりに

心の鍛錬というのは体の鍛錬よりはるかに難しい。自分自身でも難しいものを部下に鍛錬させようとすればさらに難しい。幸い武士道を極めるにあたっては先人の経験の蓄積を踏まえ、武術の鍛錬を通じて心の鍛錬と結びつけるように工夫されている。伝統的武術の理を学ぶことで、現代の戦闘訓練の技術と精神錬磨に応用できる。

生死を超越した業は、芸術的に美しいものである。実際、人質救出作戦専門部隊の突入戦術には、その凄

みと高度な技術もさることながら、「死」を覚悟した者にしかない厳しさと圧倒される美しさがある。

日本の道徳・倫理の面から見た武士道論としては、新渡戸稲造の『武士道』が有名である。その他にも、例えば内村鑑三は、「日本武士は、その正義と真理のため生命を惜しまざる犠牲の精神に共鳴して神の道に従った。武士道がある限り日本は栄え、武士道がなくなるとき日本は滅びる」とまで断言し、武士道を基盤としたキリスト教者として国際的に認知された。彼らは武士道を「日本における唯一の道徳・倫理であり、かつ、世界最高の人の道」と賞した。武士道は、世界に通用する日本人としての道徳・倫理を実践するための完成された形でもありうる。

何よりも、日本の戦士たる自衛官にあっては、武士道を実践すること自体が日本の核心的伝統を継承しつつ日本を守ることになる。

政府が何も示してくれないから精神的基盤ができないなどというのは甘え以外の何物でもない。武士道の核心は、結局、己の心に問いただし本心を見出すことなのである。仮に、肉体と精神を分けて考えるなら、肉体が欲するところを後にし、精神が欲するところを第一としてこそ、「生死」を超越した自由自在の心身を勝ち取れるものだとは私は信ずる。